

不登校経験者の不登校の意味と価値に関する面接調査

Interview survey on meaning and value of school refusal to listen to experienced truancy

大橋 佳奈

跡見学園女子大学大学院

人文科学研究科臨床心理学専攻

Kana Ohashi

Graduate School of Humanities, Division of Clinical Psychology

要 約

不登校には一般的にネガティブなイメージがあり、当人もその経験を肯定的には捉えづらい現状がある（福岡・松井・笠井，2014）。不登校のポジティブな側面を取り上げた研究は少なく、また、不登校経験のポジティブな側面に意味づけをしたり、不登校経験による自己成長感が高かったりした者はレジリエンスが高く、不登校の予後が比較的良いという報告もある（浮田・福島・長谷川，2014）。これらのことに鑑み、本研究では、不登校の意味と価値を明らかにすることを目的とした。研究の同意を得られた不登校経験者9名に半構造化面接を実施した。面接内容はICレコーダーにて記録し、逐語録を起こし、SCATを用いて分析を行った。分析の結果、不登校の意味と価値として、6点明らかとなった。①不登校に対してのポジティブな捉え方を持つこと、②不登校・ひきこもりの捉え方の変化が起ること、③自分を見つめることが出来るようになったこと、④性格のポジティブな変化が起ったこと、⑤適応的な思考の変化が起ること、⑥やりたいことを見つけられることが挙げられた。加えて、不登校を乗り越えられるきっかけとして、①人との出会い・関わり、②夢が出来たことの2点が明らかとなった。

【Key Word】 不登校 不登校の意味と価値 ポジティブな側面 面接調査 SCAT

I 問題と目的

1. 不登校の定義

不登校とは、文部科学省の定義によると、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために、年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」としている。不登校の児童・生徒数の

割合は年々増加している。文部科学省の平成28年度のデータでは、全体の生徒数のうち、小学校では約0.47%（約213人に1人）、中学校では約3.01%（約33人に1人）、高校では約1.46%（約68人に1人）が不登校であるという報告がなされている。しかし、このデータには、年間30日に満たない欠席者や高校退学者は含まれていないため、実際には、不登校に近い状態にある児

童・生徒はさらに多い可能性があるとも指摘されている（石隈・庄司，2014）。

そのため、この現状を鑑み、本研究では、文部科学省の定義に当てはまる不登校経験者を含め、登校することが難しくなり中途退学に至った経験、また適応指導教室に通うこととなった経験をした人も含めて不登校と定義する。

2. 不登校を経験してきた子どもたちの現状

不登校を経験してきた子ども達は学校復帰や通信制や定時制の学校に転校、フリースクールへ通う、ホームエデュケーションに取組むなどそれぞれに合った道へ進んでいく。しかし、様々な経験の少なさから自信のなさであったり、将来の方向性に前向きになれなかったりなど「不登校であった自分」に、劣等感をもち続ける。また、社会の中で生きていくことへの不安を抱えている（福岡・松井・笠井，2014；松井・笠井，2012）。不登校には一般的にネガティブなイメージがあり、当人もその経験を肯定的には捉えづらい現状がある（福岡・松井・笠井，2014）。しかし、松坂（2010）の不登校経験者（高校生，大学生，大学院生，社会人に実施）への面接調査では不登校経験による利益として、①不登校を経た後に獲得された肯定的な結果（良好な対人関係や努力の成果，成長感），②特別な経験をした実感の2点を報告している。また、浮田・福島・長谷川（2014）では、大学生への面接調査において、不登校経験の意味づけにおいて、否定的側面だけでなく、肯定的側面として自分らしさを経験上見出しているという報告がある。以上のこ

とから、不登校であった時期，その後の過程にはネガティブな側面だけでなく，ポジティブな側面も多々あるのではないかと考える。

3. 目的

（1）本研究の目的

本研究では、不登校経験者に自身の不登校経験について振り返り、語って頂くことで、不登校の意味と価値を明らかにすることを目的とする。

（2）本研究の意義

不登校経験の意味や価値を明らかにすることで「不登校」経験はネガティブな側面だけでなく、ポジティブな側面もあるということを示し、不登校理解を広げることになると考える。

不登校のポジティブな側面を取り上げた研究は少なく、また、不登校経験のポジティブな側面に意味づけをしたり、不登校経験による自己成長感が高かったりした者はレジリエンスが高く、不登校の予後が比較的良いという報告もある（浮田・福島・長谷川，2014）。このことから、不登校経験のポジティブな側面を明らかにすることは意義があると思われる。

II 方法

1. 調査協力者

研究の同意を得られた不登校経験者9名。（20代から30代の男性4名・女性5名）。

基本プロフィールを以下の表にまとめた。

表1 調査協力者の基本プロフィール

	不登校の主な理由	不登校の時期・期間	その後の進路
Aさん 20代 男性	・友人関係のトラブル	高3春から夏頃の2から3カ月程 (中3秋に1, 2カ月, 病気により学校に行っていない期間があった)	通信制高校に転校 大学進学 現在, 大学院生
Bさん 20代 女性	・辛いことが重なったこと	中1冬休み明けから1, 2カ月程 (その後, 保健室登校をしていた時期があった/高2秋から冬頃の1カ月未満の期間, 友人関係, 両親と関係などのことから学校に行っていない時期があった)	大学進学 現在, 社会人
Cさん 20代 男性	・友人関係 ・両親との関係	① 中3の終わり頃 ② 高1夏休み明けから次年度 ③ 留年し, 高1(2回目)の春から夏頃 (少し学校に行っていた日もあった)	高卒認定試験を受ける 大学進学 現在, 社会人
Dさん 20代 女性	・学校が好きではない ・人間関係	高校の頃 (中学は病気により学校に行っていない期間があった/大学でも行っていない時期があった)	通信制高校に転校 大学中退 現在, 社会人
Eさん 20代 女性	・転校 ・クラスになじめない	小3から中3 (中2から中3までは適応指導教室へ通っていた)	定時制高校に進学 大学進学 現在, 大学院生
Fさん 30代 男性	・集団が苦手	小3前半から中3終わり (小6の頃, 少し学校へ行っていた期間があった/中学卒業後からひきこもりの期間があった)	定時制高校に進学 大学進学 現在, 大学院生
Gさん 20代 女性	・いじめ ・家庭環境の複雑さ	小6の6月の終わり頃から夏休みいっぱい (小4から小5の頃は, 保健室登校をしていた)	現在, 大学生
Hさん 20代 女性	・学校が合わなかった ・食べ物を食べなくなり体調不良 ・家族との関係	中3秋頃から高1夏頃	通信制高校に転校 現在, 大学生
Iさん 20代 女性	・不明 小さい嫌なことの積み重ね?	① 中2冬から中3終わり ② 高1春から高2の初め	通信制高校に転校 大学進学 現在, 大学院生

2. 調査時期

調査は, 2018年6月から2018年9月に行った。

3. データ収集方法

(1) インタビュー調査のお願い

「インタビュー調査のお願い」の文章を

配り, 協力可能と申し出があった方へ研究の意義, 方法, 倫理的対応などについて詳しく説明をした。

(2) 半構造化面接

研究に同意を得られた方に40分から50分程度の半構造化面接をした。面接内容はICレコーダーにて記録し, 逐語録に起こして

分析に用いた。場所は、なるべく静かで、周囲に第三者のいない、調査協力者のプライバシーが守られる環境が望ましいため、調査協力者と協議して決めた。

4. 半構造化面接の内容

半構造化面接の内容は以下の通りである。

(1) 不登校であった時について教えてください。

- ①不登校であった時期、期間を教えてください。
- ②不登校に至るまでの経緯・きっかけについて教えてください。
- ③不登校の間の生活・そのときに考えたことを教えてください。

(2) 不登校であった時期を経て現在どのように感じているか教えてください。

- ①不登校はあなたにとってどのような影響や変化があったか教えてください。
- ②不登校を経験したことによって考えたことや思ったこと感じたことがあれば教えてください。
- ③不登校を経て現在に至るまでに支えとなったものがあれば教えてください。

但し、6名のインタビュー終了時点で、

さらに内容を明らかにするため、残りの3名には「(3) 不登校のポジティブな側面について教えてください。」といった質問を追加した。

5. データ分析方法

SCAT (Steps for Coding and Theorization: 以降SCATと表記) を用いて分析した。

SCATは、質的分析の困難さを克服するために開発され、明示的で定式的な手続きを有する初学者にも着手しやすい手法である。また、小規模データにも適用可能という利点がある。SCATでは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、〈1〉データの中の注目すべき語句〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句〈3〉それを説明するための語句〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4ステップのコーディングがある。加えて、〈4〉のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きがある分析手法とされている(大谷, 2008)

分析例を以下に示す。

表2 SCATでの分析例

テキスト	〈1〉 データの中の注目すべき語句	〈2〉 それを言いかえるためのデータ外の語句	〈3〉 それを説明するための語句	〈4〉 そこから浮き上がるテーマ・構成概念
不登校になっちゃった子とかの気持ちもその、分かるようになったし	不登校になっちゃった子とかの気持ちもその、分かるようになった	不登校の捉え方の変化	自分も不登校を経験したこと	不登校の子の気持ちの理解が出来るようになったこと

本研究で、SCATを採用した理由としては、本研究で扱うテーマが、不登校の意味と価値を明らかにするというものであり、研究対象とする現象がプロセス的性格を持っていること、9名というデータの少なさから分析方法としてSCATが妥当であると判断したためである。

6. 倫理的配慮

本研究は跡見学園女子大学研究倫理審査委員会（受付番号18-005）において承認を得た。

Ⅲ 結果

1. 分析テーマ

本研究では、分析テーマを「不登校経験者が不登校経験を乗り越えるには、どのような心理的プロセスがあるか」とする。

2. ストーリーライン、理論記述

ストーリーラインとは、「データに記述されている出来事に潜在する意味や意義を、主に〈4〉に記述したテーマをつなぎ合わせて書き表したもの」と定義している（大谷，2008）。〈4〉で生成された構成概念・テーマには下線を引いて示した。

目的に即して、全ての調査協力者の逐語データを丁寧に読み込んだ。その後、無作為に選択した1人分のデータを、SCATを用いて分析し、9名分のストーリーラインを作成した。方法でも述べたが、AさんからFさんまでは、(1)から(2)までの質問項目を設定し、半構造化面接を行った。GさんからIさんまでは、上記に加えて、「(3) 不登校のポジティブな側面について教えて下さい。」といった質問を追加

し、半構造化面接を行った。また、その後、9名のストーリーラインから共通性を見出し、統合したストーリーラインを作成した。

理論記述とは、ストーリーラインを断片化し、「このデータからいえること」を記述したものである（大谷，2011）。

以下、9名のストーリーラインから統合化したストーリーラインと理論記述を示す。9人の分析で生成された〈4〉構成概念・テーマは下線で示し、さらに共通性をまとめ、上位概念としたテーマは〈 〉で示す。

(1) ストーリーライン（現時点で言えること）

不登校を経験し、〈不登校に対してのポジティブな捉え方を持つこと〉があり、逃げる力を養えたことから、自分を守る選択肢を取ることが出来た経験、逃げるという選択肢を取ることが出来たということ、学校へ行かないという選択・主張で、勇気のいる行為、立派なことといったように不登校の捉え方が肯定的なものとなっていくようである。そのようななかから、〈不登校・ひきこもりの捉え方の変化が起こること〉があり、自分と同じような経験をした人の気持ちがわかることから、ひきこもりや不登校の人への見方の変化があり、社会から外れた人へ優しく出来るようになったことや人の気持ちの理解が出来るようになったこともあり、不登校の人に対する認識が肯定的に変化しているようであった。加えて、無理に学校に行かなくても良いという考えを持つようになり、学校へ行かなければならないというような固定観念が無く

なるようであった。また、不登校期間には、〈自分を見つめることが出来るようになったこと〉から、自分の課題の発見をしたり、自分の限界を知る期間となったり、自分を見つめる時間が取れたことで、自己内省が出来ることとなったようであった。そして、〈性格のポジティブな変化〉が起こることがあり、不登校を経験したことにより、人見知りな性格から社交的な性格へと性格の変化を感じたり、自己主張できる自分へと性格の変化を感じたりすることで、自身の性格の変化を肯定的に捉えているようであった。加えて、〈適応的な思考への変化〉が起こることもあり、0か100と言った極端な考え方が、ほどほどに休んで気楽に生きていけばいいという考え方に転換したり、無理して頑張らないという考えを持ったりすることがある。さらに、ポジティブに考えられるように考え方が変化したり、自分を責めなくなったことがあったり、自分に厳しくなくなったことがあったりと完璧でなくていいという考え方に変化するようであった。また、ポジティブな気持ちで過ごすようにしたり、自身の性格傾向から場面にあった考え方へと変化したり、友人関係の距離感の重要性や言葉の受け取り方を学んだりといった、今まで苦しんできた自分の考え方の転換が起こるようであった。このように、不適応的な考え方から適応的な考え方の転換が起こるようであった。さらに、〈やりたいことを見つけられること〉もあり、やりたいことの発見が出来た期間という面と本当にやりたいことを探せる期間という面があり、自分が本当にやりたいことを探し、発見できるようである。

そして、不登校を乗り越えていく過程には、〈人との出会い・関わり〉が重要な支えとなるようである。家族の不登校に対する理解があることや母親が不登校を受け入れてくれた・認めてくれたことにより不登校が改善の方向に向かうことがあるようだ。また、適応指導教室での同じ経験をした子どもとの出会いや転校先の通信制高校での仲の良い友人との出会いにより、その場所に通い続けることが出来るようだ。そして、モデルかつ目標になった恩師との出会いやスクールカウンセラーとの出会い、自分らしくいられかつ背中を押してくれた臨床心理士との出会いなど不登校期間に支えとなってくれた人との出会いから〈夢が出来ること〉があり、勉強を頑張ろうという気持ちが沸き、進学意欲が生じることもあるようだ。

(2) 理論記述

- ・不登校を経験すると、不登校に対してのポジティブな捉え方を持つことがある
- ・不登校を経験すると、不登校・ひきこもりの捉え方の変化が起こることがある
- ・不登校を経験すると、自分を見つめることが出来るようになることがある
- ・不登校を経験すると、性格のポジティブな変化が起こることがある
- ・不登校を経験すると、適応的な思考への変化が起こることがある
- ・不登校を経験すると、やりたいことを見つけられることがある
- ・人との出会い・関わりにより不登校を乗り越えることが出来る
- ・夢が出来ることで、不登校を乗り越えることが出来る

IV 考察

1. 不登校経験の意味と価値

不登校のポジティブな側面、つまりは不登校の意味と価値と考えられる点が、6点明らかとなった。1つ目に、不登校に対してのポジティブな捉え方を持つこと、2つ目に、不登校・ひきこもりの捉え方の変化が起こること、3つ目に、自分を見つめることが出来るようになったこと、4つ目に、性格のポジティブな変化が起こったこと、5つ目に、適応的な思考の変化が起こること、6つ目に、やりたいことを見つけられることが挙げられる。以下、詳細に述べる。

(1) 不登校に対してのポジティブな捉え方を持つこと

Gさんからは、「行かないっていう主張をするっていう風に不登校っていう言葉自体は思っていて/断ったり、ダメって言うことって、結構言えない子が多いじゃないですか、その中で、自分は行かないっていうのをちゃんと、親とか学校にぶつけるっていう、その行為自体が、結構すごく勇気があることだと思う/すごく立派なことだよっていう風に、思います/とりあえず学校に行かなきゃいけないっていう考え方が自分の中で、なくなったかなっていう風に思いますね」という発言があった。また、Iさんからは、「不登校って逃げだって言われると思うんですけど、逃げてるとか、学校から逃げているとか、世間から逃げているみたいなイメージがあると思うんですけど、でも逃げるのってすごく大変で、逃げないっていう選択より、逃げるっていう選択のほうが100倍大変だと思うんですよ。なので、その無理して学校行っ

て、なんか嫌なことあって死んじゃうよりは、嫌だったらもう行かないっていう選択をしたほう、ほうが絶対いいと思うし、その選択をできていること自体で、私はもうすごいと思うし、強いと思っている」という発言があった。また、Bさんも同様のことを述べていた。以上のことから、不登校を経験したことで、不登校に対してのポジティブな捉え方を持つことが伺える。

(2) 不登校・ひきこもりの捉え方の変化が起こること

Aさんから、「僕、人のことそんなに興味がないっていうか、あんまり共感したりとかっていうのがそんなになかったタイプの人間だったんです、昔。だけど、自分が辛い思いしたから、こう、ほかの人、そういう思いをしている人に目が向くようになった」という発言があった。また、Hさんからは、「ひきこもっているような人、もなんか、だらしないとかそういう、なんか怠けているのではないなあっていうのは思うようになった/社会から一旦外れている人達に優しく出来るのもそうだし」という発言があった。また、Dさん、Eさん、Fさんも同様のことを述べていた。以上のことから、不登校経験をするすることで、不登校・ひきこもりの捉え方の変化が起こり、肯定的な見方が出来るようになるということが伺える。

(3) 自分を見つめることが出来るようになったこと

Aさんから、「高校は特に人間関係っていうのがあったので、まあ一つ自分の課題として人間関係を、なんだろうな、よくよくしていこうっていうか、作れるようにしようってことで、まあ大学に入ってっていう

ところもあったので、げ、原動力っていうか、になった。」という発言があった。また、Fさんからは、「内省、自己内省をだぶ一人で考え、れる、～表に出ればそうはなっていなかったかもしれないですね」という発言があった。さらに、Hさんからは、「追い詰めないとか、まあ、出来ないときは出来ないでしょうがないって思えるようになったというか、なんか自分の限界が分かった感じがする」という発言があった。また、Hさんも同様のことを述べていた。以上のことから、不登校経験をすることで、自分を見つめることが出来るようになったということが伺える。

(4) 性格のポジティブな変化が起こったこと

Aさんから、「社交性も身に付いたし、人見知りもなおった」という発言があった。また、Iさんからは、「あまり自分の意見とかを言わなかったりとか、してた結構たぶん、どっちかというと静かめだったと思うんですけど～自分の好きなことをみんなにバンバン話すので、自己主張が激しくなったというか、言いたいことを結構言うようになって、なのでなんですか、なんか、性格真逆になったんじゃないかっていう感じぐらい、自分では変わったなあって思って～自己主張するようになったっていうのはすごいおっきいなあって思って～何も言わないよりはいいのかなって思って、それはいい面の方が大きいかな」という発言があった。以上のことから、不登校経験をすることで、性格のポジティブな変化が起こることが伺える。

(5) 適応的な思考の変化

Bさんから、「不登校の時に結構極端な

考え方をしていたんですよ/今、過去を振り返ってみると、その1か100かの思考はすごく間違っていると思うし、そういうことを考えているから苦しくなるんだっていうのを過去の自分を見て分かるので、今はそういう考えはしないで、ほどほどに頑張っていて、ほどほどに休んで、気楽に生きていけばいいんじゃないかと考えるようになったので、そういう意味でも影響を与えています」という発言があった。また、Eさんから、「無理して頑張らないみたいな、思い、価値観と言うか、そういう、性格にはなったなって思います。」という発言があった。加えて、Hさんから、「なんでもポジティブにするようになったような気がする/完璧じゃなくてもいいなとか、うーん、なんかそんなに頑張らなくてもいいなっていうのは、不登校経験したから思うようになったかな」という発言があった。また、Cさん、Dさんも同様のことを述べていた。以上のことから、不登校経験したことで、自分を苦しめていた不適応的な考え方から適応的な考え方に変化するようだ。

(6) やりたいことを見つけられるということ

Fさんから、「自分の、興味本位ですけど、自分の悩みともつながるのかなっていうので、あ、じゃあ、自分がやりたいのはそれだなあって思って」という発言があった。また、Hさんから、「自由に生きていみたいな、なんか、気づけるっていうか～もしやりたいことがある人だったら、その年でも別な道に行ってもいいし、っていうなんか、いろんな道あることに気づけるっていうか、～決められたルールっていうのから外れるのもまあ、悪くないなあ、気

づけるチャンスっていうか、本当にやりたいことを探せる期間なのかなあと思う」という発言があった。以上のことから、不登校経験したことで、やりたいことを見つげられることがあるようだ。

2. 不登校を乗り越えられるきっかけ

不登校を乗り越えられるきっかけとして、人との出会い・関わり、夢が出来たことの2点が明らかとなった。乗り越えるということは、単に学校に行けるようになるということだけでなく、次のステップに進んでいくという意味も含み考察する。以下、詳細に述べる。

(1) 人との出会い・関わり

Cさんからは、「学校行けなくなってから、その、カウンセラーの先生にお世話になって、で、元々そのうちの中高に来ていた、あのうスクールカウンセラーの方で、～そういう先生とか、まあ本当に助けられたなあっていう風に思いますね。」という発言があった。また、Dさんからは、「通信のときもやっぱり最初はもう学校行きたくなさすぎて、通信、1年生の時はほとんど行けてなったんですよ、通信も。なんですけど、なんだっけな、なんか、テストは、受けに行かなきゃいけなくて、テスト無理やり行ったんです。そんな時に、仲良くなった友達が、なんか、あ、なんか、すごい、楽しくさせてくれたんですよ。～学校行くのが少し苦じゃなくなったんですよ。/家族が、なんていうんだろう、親がなんか割と受け入れてくれたので、すぐに最初は、まあ、え、なんでってなったんですけど、でも、しょうがないねってなったので、その時に、親とかお姉ちゃんとか

がちゃんと、聞いてくれたりとか、そういうのがあったから、そうですね、支えになりました。」という発言があった。さらに、Eさんからは、「適応指導教室の臨床心理士の方はすごく話やすく、はい、なんか、素が出せるというか、自分のちょっとダメなところとか、面倒くさがりなところとかすごい受け入れてくれて、でもそれでも、背中を押してくれるみたいな人で、そういう面では、なんか、信頼できる大人が、母親以外に出来たっていうことは大きいし、なんか、今でもその人は理想像なので、私の、そういう部分で大きい人ですね、結構。/やっぱり一番大きいのは、母親が結構、なんか学校に行かないことを認めてくれたというか、受け入れ始めてくれた時期っていうんですかね、だったのが大きいかなっていうのは思います。」という発言があった。また、Aさん、Bさん、Fさん、Hさん、Iさんも同様のことを述べていた。以上のことから、不登校を乗り越えていくには、人との出会い・関わりが重要であることが伺える。

(2) 夢が出来たこと

Aさんからは、「恩師っていうのが一番当てはまるなって思っていて、うん、高校1、2年生の時の、担任の先生がいらっしやって/恩師っていうのは結構、モデリングに近いところがあるんで、心理学の先生もそうですけど、その先生みたいになりたいなあっていうのが結構ある」という発言があった。また、Fさんからは、「アンソニー・ストウっていう人が、分析家、ユング派の分析の人で、で、「フロイト」っていう伝記、伝、解説書みたいのとか、あとはそう、臨床心理学に関する本が何冊か書い

てあっ、書いてたんですよ、だからそれがきっかけですね。あのう、臨床心理学があるんだっていうのを、～こういう、心について考える学問があるんだっていうのを、その、その人の本で知って、あじゃあ、ちょっと、まあ自分の、興味本位ですけど、自分の悩みともつながるのかなっていうので、あ、じゃあ、自分がやりたいのはそれだなあって思って、～今の感じになっているんですけど、はい。」という発言があった。また、Cさん、Eさんも同様のことを述べていた。以上のことから、夢が出来ることで、不登校を乗り越えていくことに大きく影響するということが伺える。

3. まとめ

不登校を乗り越えていくには、人との出会い・関わりや夢が出来ることが大きく影響しているということが伺える。そして、不登校を乗り越えてきた不登校経験者は、不登校のポジティブな側面として、不登校に対してのポジティブな捉え方を持つこと、不登校・ひきこもりの捉え方の変化が起こること、自分を見つめることが出来るようになったこと、性格のポジティブな変化が起こったこと、適応的な思考への変化、やりたいことを見つけられることの6点を見出し、これらは、不登校の意味・価値であると考えられる。

不登校経験には、ネガティブな側面についても挙げられたが、ポジティブな側面についても多々挙げられた。これらのことは、不登校経験者たちが懸命に生きようと取り組んだ結果であると思われる。不登校は、自分が壊れてしまわない前にブレーキを自分でかけることの出来たということ

あると考えられる。大人であっても、仕事場の環境により自分が壊れてしまう前には仕事を辞めて休んだり、転職をしたりする。子どもにとっては、仕事場が学校であり、自分が壊れてしまう前に逃げるという選択肢を取り、別な場所・機会でおぼという選択肢をもう少し肯定的に考えても良いのではないだろうか。

また、子どもにとっては、教育を受ける権利はあるが、学校へ行く義務はない。教育の機会確保法が2017年に施行されたが、多様な学びの場・機会を認めていくことの重要性を示唆していると思われる。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界点と課題を4点述べる。

- ①本研究の協力者は、研究の目的を知った上で協力して下さっていたため、元々不登校への捉え方がポジティブな方もしくは、ポジティブな側面を感じている方が協力して下さっている可能性がある。
- ②協力者の9名という人数の少なさ、不登校理由、不登校期間などにばらつきがあり、今回の結果はあくまで、この対象者に言えることであり、一般化することは難しい。
- ③調査協力者の年齢についてである。30代の方が1名おられたが、20代が多くを占めている。30代、40代、50代など年齢によって、捉え方が変化する可能性がある。
- ④インタビュー項目の検討の必要性がある。今回のインタビュー項目は、本研究で明らかにしたいことについて、遠回しであったように思われる。ダイレクトに、不登校のポジティブな面を聞く質問

が必要であったと考えられる。また，途中で，質問項目の追加をしたが，6名には「(3) 不登校のポジティブな側面について教えて下さい。」という質問をしておらず，6名にも同様に質問していた際にポジティブな側面についてのデータがさらに取れていた可能性がある。

謝辞

本論文執筆にあたり，適切なお助言とあたたかいご指導を賜りました，跡見学園女子大学教授の野島一彦先生に厚くお礼申し上げます。また，本研究の趣旨を理解し，調査にご協力くださいました協力者の方々に，心より感謝申し上げます。そして，本論文執筆において，ご検討いただいた跡見学園女子大学野島ゼミの皆様にも心より感謝申し上げます。

引用文献

- 福岡朋行・松井美穂・笠井孝久 (2014). 不登校を経験した若者に対する継続的支援の意義と課題. 千葉大学教育学部研究紀要, 62, 301-307.
- 石隈利紀・庄司一子 (2014). 生徒指導とカウンセリング. 協同出版.
- 松井美穂・笠井孝久 (2012). 不登校を経験した青年の育ちを抑制するもの - 不登校経験の意味づけと影響 -. 千葉大学教育学部研究紀要, 60, 55-62.
- 松坂文憲 (2010). 不登校経験者が語る“不登校経験の意味” - 自己資源化の可能性 “の提案 - . 岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要, 19, 39-56.
- 大谷 尚 (2008). 4ステップコーディネ

グによる質的データ分析手法SCATの提案 - 着手しやすく小規模データにも適応可能な理論化の手続き -. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 54, (2), 27-44.

- 大谷 尚 (2011). SCAT: Steps for coding and Theorization - 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 -. 日本感性工学会論文誌. 10, (3), 155-160.
- 坂野雄二 (編) (1990). 登校拒否・不登校. 同朋舎出版.
- 浮田あすか・福島裕人・長谷川晃 (2014). 不登校経験を持つ大学生の成長過程. 東海学院大学紀要, 8, 141-154.
- 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査. (2018). 高等学校の長期欠席 (不登校等). (2018年2月23日). https://www.e-stat.go.jp/statsearch/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400304&kikan=00400&tstat=000001112655&cycle=0&tclass1=000001112656&tclass2=000001112657&tclass3=000001112662&result_page=1&second=1&second2=1 (平成30年12月16日最終閲覧)
- 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査. (2018).
- 小・中学校の長期欠席 (不登校等). (2018年2月23日). <https://www.estat.go.jp/statsearch/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400304&kikan=00400&tstat=000001112655&cycle=0&tclass1=000001112656&tclass2=000001112657>

&tclass3=000001112661&result_page=
1&second=1&second2=1 (平成30年12

月16日最終閲覧)